

2000万世帯大調査◎解明! 老後もお金に困らない生き方

PRESIDENT

プレジデント

毎月第2・第4月曜日発売 2016.8.29号
特別定価750円

片づけ、病院、介護、相続、お墓…

「実家」の 大問題

一挙解決ノート



この夏、
親子で話そう



「片づけられない」人はなぜ、片づけられないか？

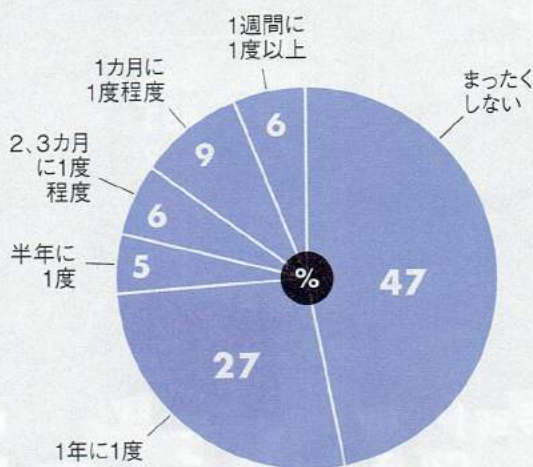
「意地汚い」ことを
するのはお年寄り」

実家の片づけは、単なる物品の整理ではない。そこに注がねばならない気力・体力・資金が普通ではすまないことに、世間はようやく気づき始めた。

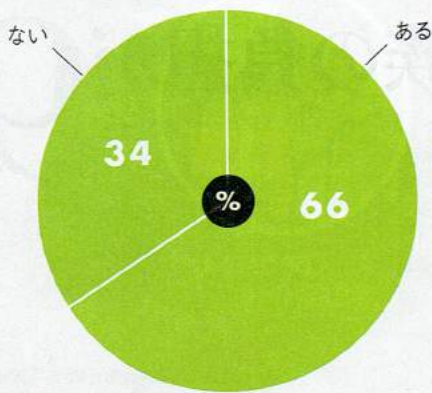
「私はよく『ハラを括りなさい』と言っんです」——日本美しい暮らしの空間プロデュース協会の安東英子理事長は、自身の数多くの片づけアドバイスの経験からそう断じる。

「片づけを甘く見てはいけません。親と大ゲンカする覚悟がないとできません。『片づけは私が死んでからにして』という親のセリフは耳にタコができるくらい聞きました。が、売り言葉に買い言葉で『じゃあ、今すぐ死んで』って言っちゃった方も」

親子の縁が切れるケースもあるというのだ。無理もない。久々に訪れた実家の収納に、たとえば賞味期限切れの食材、アイスクリームのカップ、空のペットボトルといった理解不能の物品が大量に詰め込んであって、親がそれを捨てようとする、親



実家の「片づけ」はどれくらいの頻度で行いますか？



実家には、捨てたいがなかなか捨てられないものがありますか？

アンケート調査概要:「実家の親の問題」について編集部とアイブリッジで実施。40歳以上の男女100人より回答を得た。調査日:2016年7月25日

は頑強に抵抗するのである。

端的にいえば、新聞にはさみ込まれた広告紙を保管してメモ用紙代わりに使う習慣、身に染みている世代と、それを単に「セコい」と感じる人とが折り合いをつけるのは簡単ではない。

今回、片づけとそれにまつわるトラブルをヒアリングしているうちに、筆者は大地震の被災地を取材した際の出来事を思い出した。

避難所となっていた学校の体

育館では、年齢・世代もバラバラの被災者の方々が、毛布や段ボールを分け合いながら、長期間ともに過ごしていた。

脱いだ靴を手に、段ボールだけでプライバシーを保った体育館の中を遠慮がちに歩いたが、外に出たところで、三十代と思しきボランティアの女性が「物を盗ったりとか、意地汚いことをするのはだいたいお年寄り。物への執着がすごく強い」と、ひそひそだが強い口調で憤っ

たのに、思わずたじろいだのだ。被災地だけではないだろう。

平均寿命が延び、八十代・九十代の老人が珍しくなくなった今は、第二次大戦後の焼け野原から高度成長期、バブル、「失われた二〇年」……と、まったく異なる原体験を持つ数世代が、そこで培われたまったく異なる物・カネ観を抱きつつ、同じ時間を共有しているのである。

もちろん、物を減らしてシンブルに暮らす老人も存在するが、

別々に暮らしているうちは直視せず、すんだ物・カネ観の違いがむき出しでぶつかり合う。それが「実家の片づけ」なのである。

ようやく捨てる段階に至ったとしても、処理費用はしばしば目を疑う金額に跳ね上がる。詳細は後のページに譲るとして、根柢の薄い楽観論で見えて見ぬふりをしているうちに、正念場はすぐに訪れる。なるべく早く動き出しておいたほうがいい。

「思い出」症候群

片づけに親との摩擦はつきものだが、だからこそ言葉の使い分けは重要だ。段取り一つ、言い回し一つで進み具合は劇的に変わる。きっかけづくりの意外な方策も紹介。

P.33

COMMENTATOR
安東英子

「日本美しい暮らしの空間プロデュース協会」理事長。福岡県の地元TVで13年間リフォーム担当。2014年より東京を拠点に。片づけ・収納アドバイス・リフォーム等々の実績5000軒以上を誇る。

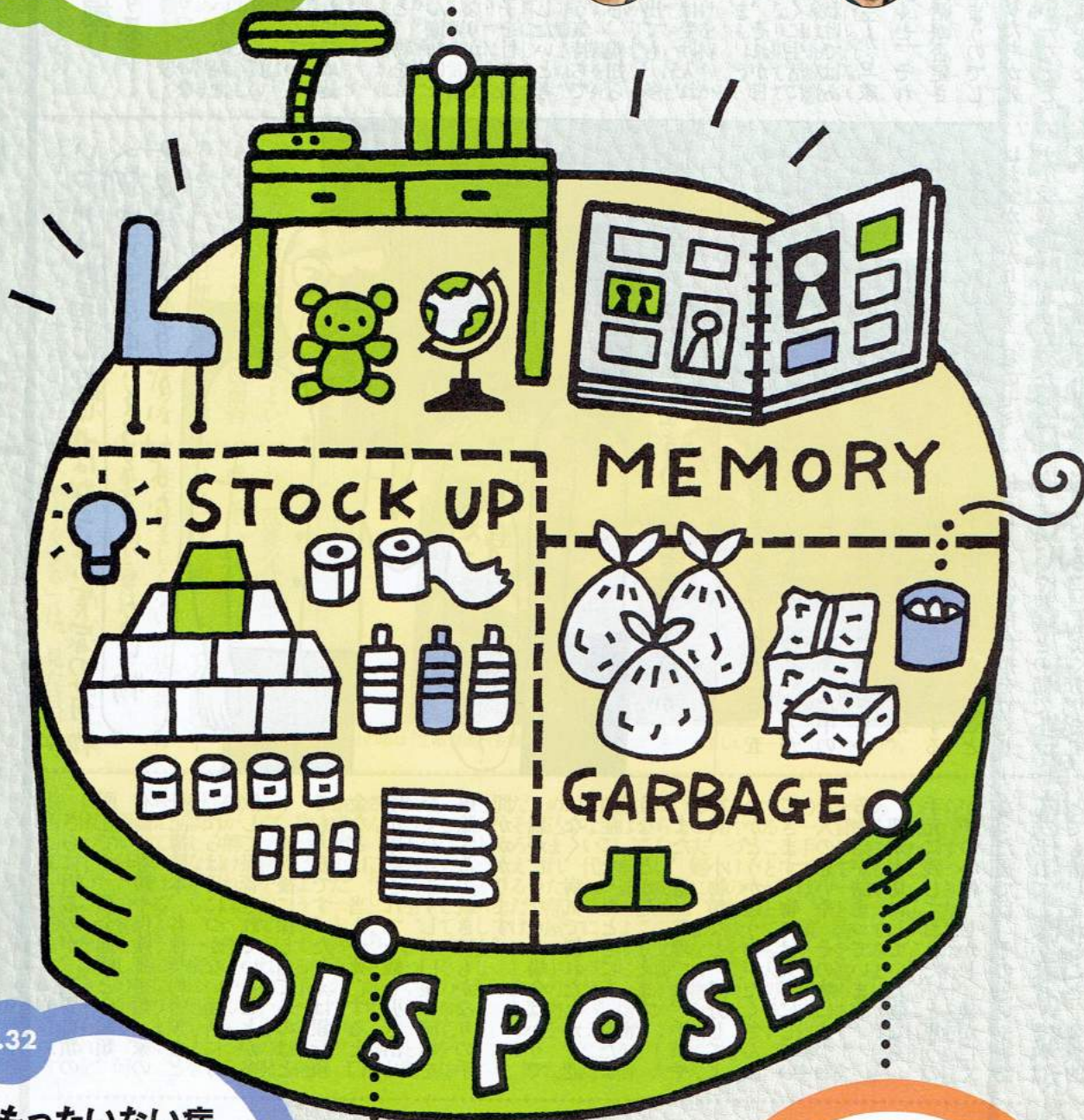


安東英子
Eiko Ando

アクト片付センター社長。1955年、横浜市生まれ。中央大学工学部卒業。技術士（建設部門）として都市計画に数多く参画した後、人への奉仕を目指し便利屋業から需要の多い部屋の片づけ業に特化。



木下修
Osamu Kinoshita



P.32

もったいない病

実家の片づけは、親の死後だとかえってやりづらくなる。重要書類の所在がわからなくなるうえに、かかった費用の分担を巡って、親族間で深刻なトラブルになるケースが多いのである。

COMMENTATOR
安東英子

認知症発症

老夫婦の家を一軒片づけると、廃棄物ほどの程度出る？ いくらかかる？ そんなリアルな数値を開示する一方、実家の室内が「地獄」と化す理由の一つは、やはり老親の認知症だ。手遅れにならない方策はあるのだろうか？

P.34

COMMENTATOR
木下修

もつたいたない病

なぜ片づけは、「死んでからでは手遅れ」なのか

物語を一緒に掘り起こし、共有する

「物を捨てるのはもつたいたない」という思いが強い今の親世代。使いたくない贈答品や買いだめしたまま忘れ去られている物が、納戸や押し入れに詰め込まれていませんか？

そのうえ年を取ると、物を片づけることがだんだん億劫になり、家の中が乱雑になりがちです。そんな実家の様子を目の当たりにして、何とかしたいと考えるのが子の親を思う気持ちです。けれども「子の心、親知らず」で、それを申し出ても、多くの親はすんなりとは受け入れられません。

家の中が乱雑でも、それが日常であれば、親はとくに生活に不自由を感じていないわけではありませぬ。ですから、子から「家を片づけて」と聞くと、それまでの自分たちの生活が否定されるように感じてしまうのです。よう。「やるなら、私たちが死んでからにしてほしい」などと、強い言葉で拒絶する親が少なく

いつかは整理しなければならぬ実家のせ何物
物置置きの中、そろそろいろいろな物
処分した方がいいよな



ありません。しかし、親の持ち物が遺品になってからでは遅いと、私は力説しています。遺品のほとんどは不用品。その処分が大変なのです。

まず、親が残した物の処分に
はお金がかかります。私のセミナー受講者に、親が亡くなった後、産廃業者に依頼して不用品

家財道具を処分したところ、五

〇〇万円もかかったという方が
いました。これまで聞いた中の
最高額でした。これはいささか
特殊なケースではありますが、
不用品を廃棄物として処分する
と数十万円の費用がかかること
はざら。その費用負担をめぐり、
きょうだいや親戚との間でトラ
ブルになることもよくあります。

さらに困るのが、重要書類の
所在です。預金通帳と印鑑類、
有価証券類や保険証書類、家の
登記簿謄本、各種契約書類など。
これらは目につかない場所に分
散して保管されていることが多
く、死別後に探し当てるのはと
ても大変です。たとえば銀行預
金などは、本人が死亡すると口
座が凍結されて一銭も引き出せ
なくなり、口座の凍結を
解除する手続きにもかなりの手
間がかかります。

親が亡くなった場合はかりで
はなく、病気で倒れたとか、認
知症になったときにも、似たよ
うなことが起こりえます。

また、遺品整理では、手紙や
写真、小物類など、処分してよ
いかどうか迷う物がたくさん出
てきます。物には大事にしてい
た人の思いや、その物にまつわ
る物語が詰まっています。

親が大切にしていた物なら、
手元に残しておきたいと思うの
が子の心情。しかし、親が亡く
なった後では、その思いや物語
も失われてしまいます。それは
とても惜しまれること。金銭的

な価値では測れない、親から受
け継ぐべき財産といえるのでは
ないでしょうか。

ですから、親がまだ元気で、
自立生活ができていよううちに、
少しずつでも身の回りを整理し
ていくことをお勧めします。も
ちろん、冒頭で触れたように、
必ず抵抗に遭います。そこをど
う乗り越えるかは、別の項で述
べることにしましょう。

言うことを聞いてくれない親
に腹を立てることなく、がまん
強く進めていけば、少しずつ子
の思いを理解してくれるようにな
ります。片づけを拒絶してい
た当初から一八〇度態度が変わ
るケースもよくあります。

ただ、ひとつだけ心にとどめ
ておいてください。実家の片づ
けを、単純な不用品の処分だとは
思わないでください。取りか
かってみると、すぐにわかると
思います。実家の片づけは、一
見不用品の山と思われる物の中
から、親が大切にしてきた物と、
それが携えてきた物語を一緒に
掘り起こし、共有する作業なの
です。

(安東英子)

「思い出」症候群

アルバム、本、学習机……執着が消える「ひと言」

「おじいちゃん、物を捨て始めた」

自分では物を片づけられなくなった高齢の親。実家はお屋敷ならぬ「汚屋敷」となり果てている。さて、どうしましょう。

子が親に家の片づけを持ちかけると、必ずといっていいほど反発されます。親ばかりでなく、きょうだいや親戚から「親を死人扱いするのか」と非難されたというケースもよく耳にします。

実家の片づけをテーマにしたハウツー本などには「親の気持ちも尊重して」「ほかの家族にも配慮して」などとよく書かれています。それでは物が片づかない場合も多々あります。

実際に私の経験から言えば、実家の片づけに採め事はつきものです。むしろ、採めずに済ませるほうが困難だと思っただけです。課題は、反発する親心をどう鎮めるかです。

私がよくアドバイスするのは「片づける」「整理する」という言葉をけつして使わないこと。言葉による説得ではなく、親が



片づけの場は「工事現場」(安東氏)。ゴミ屋敷化は、決して珍しいケースではないという。

これなら受け入れるだろうという小さな試み、たとえば洗面台のように、毎日使う小さな空間をきれいに、使いやすくするな

どして親の反応を見ます。お年寄りは生活の変化を嫌います。「片づける」「整理する」という言葉には、物を「捨てる」「処分する」というイメージがつきまといま

れ、乱雑な状態でも、不自由を感じていなければ「片づけましょう」は、親にとって余計な干渉。好ましくない変化を強いら

れていると受けとられます。しかし「きれいにする」「使いやすいにする」は、見た目がよくなり、便利になることです

ら、すっきりしたね」とでも言われたらしめたもの。「じゃ、あそこもやってみましょう。手を貸して」と駒を進めます。次の一手では、親と一緒に作業をすることがとても大切です。

片づけの相談を受けた、とあるご夫婦に、頑なに物を捨てたがらない高齢の父親がいました。私は、前述のように一切物を捨てない代わりに、バラバラにため込まれた部屋の中の物を、ただそろえるだけにしましょう、とアドバイスしました。

しばらくして、そのお宅を訪ねると「先生、びっくり」と奥さん。「おじいちゃんが、物を捨て始めた」と言うのです。

片づけようとする子への反発心や、物を捨てられない心の呪縛が解ければ、後は一つ一つを相談しながら、一緒に処分法を考えていけるようになります。

親が日々の暮らしの中で、何に困っているかを聞き、それを改善していくのもよい方法です。そうして話を聞き、親の生活を一緒に改善していく中で、それまで知らなかった親の思い出話

や、家族への思いやりに触れる場面がよくあります。親が生きてきた道を理解する意味で、それは貴重な体験にもなります。

きっかけづくりの一つとして、実家に置いたままになっている自分の物を引き取るのもよいと思います。実家を物置代わりにして、私物を預けっぱなしにしてはいませんか？ 二十〜三十代の男性に、そういう方が多いように見受けられます。

実家に放置された子の持ち物は、親には「触れがたい物」「扱いたくない物」。それらがなくなるのも、親にとっては好ましい変化であるはず。空いたスペースの使い道から、片づけの相談に入っていくこともできるかもしれません。

親が好ましいと受け入れてくれる、小さな変化を考える。それは、停滞しがちな高齢者の生活にちょっとした刺激を与えること。新鮮な刺激は、人の活力の源泉でもあります。決して無理強いせず、片づけに入るきっかけづくりをいろいろ工夫してみてください。(安東英子)

認知症発症

異臭発生、カビの巣窟、ゴミ屋敷……に忍び寄る病魔の影

海苔は捨てずに
佃煮にすればいい

お盆の時期に最も多い依頼は、実家に家族全員がそろっているタイミングで家の片づけをしてほしい、というものだ。

正直に言うと、お盆は処理場が休みなので複数の依頼を受けるのは難しいのだが、「どうしても」というお客さまが多い。いろいろな意味で、実家の片づけは親だけでも子供だけでも難しいということだろう。

私は地獄としか言いようのない壮絶な室内を何度も見てきた。盆と正月の年二回しか帰省しない人は、実家がとんでもない状況になってしまう危険性を認識しておいたほうがいいだろう。

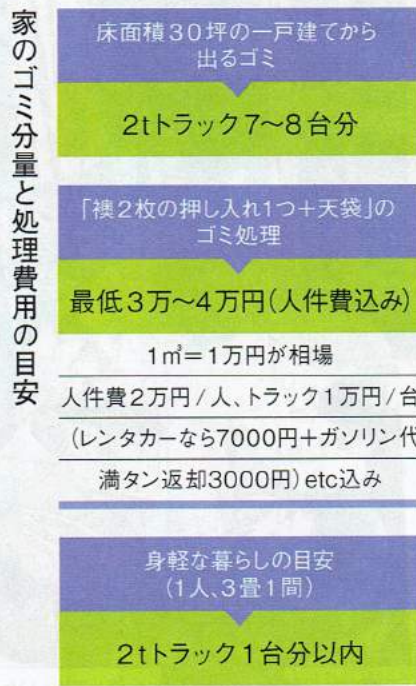
一見、何も問題がないようでも、「その部屋は散らかっているから入らないで」などと親が言い出したら要注意だ。その部屋は物で埋め尽くされている可能性が非常に高い。

実家がゴミ屋敷ならぬ物屋敷になってしまいうのは、時間の問題と断言していいだろう。

老親が暮らす実家がそうした状態になってしまいう理由は、いくつかある。

第一は、親が認知症を発症している場合だ。私は医者ではないが、いから正確なことは言えないが、認知症を発症している老人は被害感情が強い場合が多いように

思う。子供さんから依頼を受けて片づけに行っても、「あんた、何を盗みにきたの？」といった反応をされてしまう。揚げ句の果てに、「あんた、ここに置いてあった物、盗んだでしょう」などとあらぬ疑いをかけられて、警察を呼ばれたこ



とさえある。

あるとき、子供さんから「一戸建てにひとり住んでいる母親が軽い認知症になったので同居したい。部屋を片つけてほしい」と依頼されたことがあった。

子供さんとしては、借家の家賃を浮かし、孫の面倒を見ても

らいつつ、母親の介護をする算段だったのだろうが、現場に行ってみると五つある部屋すべてが、天井まで届く荷物で埋め尽くされていた。八割が食材だ。「この四十万十川の海苔、賞味期限切れだから捨てましょうね」「佃煮にすれば大丈夫よ」

万事この調子で、頑として処分を拒否されてしまう。ネズミや虫がわくとと言っても「ノー」。こうなるとは、もう手遅れ。我々ができることにも限界があり、同居の計画は見直す以外になくなってしまった。

実家の床じゅうに ペット・ネズミの糞

第二は、配偶者に先立たれた親が心理的な変化を起こす場合だ。寂しさを紛らわせるために犬や猫を飼い始める人が多いが、これが地獄を招き寄せる。

母親が入院している間に家を片づけてほしいという依頼を受けたことがあった。駆けつけてみると、床じゅうがペットの糞、ネズミの糞で埋め尽くされたドロドロのラビリンス状態である。依頼者の母親は、この糞だらけの床に倒れているところを警察に見えられ、病院に担ぎ込まれたのだ。

「どうしてこうなってしまったんですか」

「父が亡くなってから、母は誰も寄せつけなくなりました」

一度、ここまで汚れてしまいう掃除程度ではどうにもならない。床を張りかえてリフォームするか、リフォーム代を捻出できない場合は、床を洗浄してから樹脂を塗って臭いと虫を封じ込め、合板でも張るしかない。いずれにせよ、相当な費用がかかるし、売却も難しくなってしまう。

こうした惨事を避けるには、親とまめにコミュニケーションを取りながら、計画的に少しずつ実家の片づけを進める以外にない。老夫婦は平均すると二トトラック七、八台分の物を抱えているものだが、人間がひとり生きるには一台分で充分だ。

家財の処理費用は、人件費一人二万円、トラック一台一万円込み(レンタカーなら七〇〇〇円+ガソリン代満タン返却三〇〇〇円)で一立方メートルあたり一万円が相場を自力でやれば、約四万円の節約になる。それを励みに、お盆は実家の片づけに精を出してほしい。

(木下修 P)